

## 〈研究動向〉

# ヨーロッパスポーツ科学学会第 24 回年次総会の紹介

大澤 拓也

(日本女子体育大学健康スポーツ学専攻准教授)

## はじめに

2019 年 7 月 3 日から 6 日までの 4 日間、チェコ・プラハにおいて、ヨーロッパスポーツ科学学会 (The European College of Sport Science) の第 24 回年次総会 (The 24th Annual Congress) が開催された (<http://ecss-congress.eu/2019/19/index.php>)。本学会は 1995 年フランス・ニースで設立され、1996 年より年次総会が毎年開催されている。学会名称が示すように「スポーツ科学」を中心とした学会であるが、その内容は多岐にわたる。本稿では、第 24 回年次総会について、著者の視点より本大会の内容や様子を伝える。また、執筆に際して、今後、本学会大会に新たに参加する研究者の参考になることも念頭に置いた。

## 大会会場

今年の大会会場都市はチェコの首都プラハであった。街全体が世界文化遺産に登録されており、観光のために参加したわけではいへ、その街を楽しみにしていた参加者も多いだろう。実際、建造物や自然が想像以上に美しく、少し歩くだけでもほかでは得られない気分や感情になれる街であった。また、例年のことだが、年次総会が開催された 7 月上旬、日本の多くの地域は梅雨の時期であり、その環境から抜け出して雲一つない快晴の異国へ来たこともそのような気持ちにさせてくれたのだろう (写真 1)。

## 参加者

本大会における参加国は約 80 の国・地域、



写真 1 学会会場から撮影した街の様子

参加者数は初日の時点で 2700 名以上と発表された。国・地域別に見ると、ヨーロッパや北アメリカ、東アジアからの参加者が多いが、印象としては過去（筆者は 2013 年（スペイン・バルセロナ）と 2015 年（スウェーデン・マルメ）に参加している）と比べて、東南アジアや南アメリカからの参加者が増えた印象を持った。なお、毎年のことと聞かすが、参加者数が最も多い国・地域は日本であり（439 名）、2 位の中国と比べて 2 倍以上の人数であった。

### プログラムと学会賞

本大会のプログラムは、連日 8:00 より 20:00 まで（最終日のみ 19:00 まで）、2 フロア吹き抜けの大ホールを含めて計 12 の口頭発表会場、および 1 のポスター発表会場にて様々な発表や論議が行われた。セッションは 4 のプレナリーセッション、35 の招待セッション、138 の口頭セッション、76 のポスターセッションに分かれており、電子ポスター（後述）も含めて、演題総数は 1,881 であった。その内容はすべてスポーツ科学に関わるものの、非常に多岐にわたっていた。本大会会長である Václav Bunc 先生が開会挨拶において、“a latest research”とともに、“a wide range of sessions”や“a wide variety of topics”との言葉を用いているが、まさにその目的を達するにふさわしい学会大会であったと思える。その幅広さを示す例をあげるのも難しいが、生理学や医学、心理学、栄養学、バイオメカニクスはもちろん、様々なスポーツ種目を冠したセッションも多く、また一方では、分子生物学のセッションも設けられていた。さらに、発表された内容の多くは学際的であり、ひとつのセッションを聴講するだけでも、非常に幅広い知識や見解を得ることができる。また多くの国・地域からの集まりであることも、これらに影響しているだろう。このような幅広さは今までの自分の考えになかった新たな視点を発見することにつながるのではないかと考えられる。

本学会大会では、いくつかの賞が設けられており、35 歳以下の研究者を対象とした Young Investigators Award (YIA) やスポーツ栄養学分野における Gatorade Sport Science Institute (GSSI) Nutrition Award などがある。賞金も高く（少なくとも著者はそのように感じる）、例えば YIA の口頭発表の最優秀者には 4000 ユーロが授与される。YIA の候補者はアブストラクトより選考され、最終日、プログラムの最後に候補者による発表と受賞者の発表が行われる。今回の受賞者はスウェーデン所属の若手研究者であり、タイトルは Improved postural control in the elderly after long-term balance training is related to intracortical inhibition modulation であった。YIA の発表を聞くと、本学会における研究の潮流をとらえることができ、自身の研究にも大変有益であると考えられる。

### 発表形式

発表形式は招待セッションを除くと、口頭発表（発表 10 分、論議 5 分）、ポスター発表（発表 3 分、論議 2 分）、電子ポスター（掲示・発表・論議はなく、事前登録された 1 枚のポスターを会場設置パソコンにて検索・閲覧できる。）に分けられる。上述の通り、本学会大会には多くの国・地域からの参加者がおり、英語を母国語としない研究者も多いが、いずれの発表においても、英語に不慣れな発表者に対して、座長や質問者はそれに理解を示すように話をする様子が見られた。また、ポスター発表では、座長によっては発表や論議の時間に融通を利かせ、論議や発表者の理解に合わせて時間を調整している様子も見られた。著者が過去に参加した 2 回大会もそうであったが、本学会にはそのような文化があることがうかがえる。一方で、同じ興味を持つ他の研究者からの鋭い指摘、全く別の分野からの質問や示唆など、各スポーツ科学分野の集まりである本学会らしい質疑応答が行われていた。

今回、特にユニークかつ発表者・聴講者にとつ

て好評であったのは、ポスター発表セッションの発表形式である。以前、著者自身が参加した大会では、2013年にはA0サイズで作成したポスター1枚を大画面に見せて発表する形式（発表者・聴講者のみならず座長からも不評であった。）、2015年にはポスター形式の発表自体がなく、スライド4枚による2分間のミニ口頭発表であったが、今大会では印刷されたポスターを掲示して発表する形式（conventional poster presentation）となった。ただ、発表形式は大きな工夫がなされており、発表者や聴講者は配布されたヘッドホンとマイクを通して、発表や質疑応答などのコミュニケーションをとり、論議していた（写真2）。ポスター発表では発表者の声が小さくて（または遠くて）はつきりと聞こえない、他の発表や論議が聞こえてきて集中できないなど、多くの方が経験していると思われるが、本大会ではそのようなストレスや障害が大きく低下したと考えられる。まだ、マイクやヘッドホンの数、ポスター発表会場の広さなどの改善点はあるが、これまでのポスター発表よりも発表者としても聴講者としても快適になり、議論をより深く、より広く進められるようになった。今後、本学会の大会だけでなく、他の学会へも広がっていくのではないかと思えた。

### そのほか：イベント

本学会の特徴として、豪華な昼食・軽食や様々なイベントが開催されることも挙げられる。例えば、チェコの伝統的なダンスによるオープニングセレモニー、Bengt Saltin 先生の名前を冠したランニングイベント、最終日夜には宮殿（Žofin Palace）でのクロージングパーティ（写真3）などが催された。それらでは単にそのイベントを楽しむだけでなく、同じ場に居合わせた研究者同士、リラックスした中で様々な会話が行われた。その中には、論文で何度も目にしたような研究者も学部学生も同じ場にいた。また、元サッカー選手であり、現在は国際コーチライセンスの取得も目指しているという研究者とも話す機会があった。このように様々なバックグラウンドを持つ研究者と話ができるのも本学会のイベントならではの、特徴だと言える。また、これは他の国際学会でもいえることだが、このような場で出会う日本人研究者（特に他の分野の研究者）とはここだからこそ出会え、話す機会が得られたと感じる。国内では話をしない（話をする機会がなかなか得られない）研究者との縁が生まれるのも、このような場だからであり、この縁がその後の研究人生に影響を与えることもあるだろう。

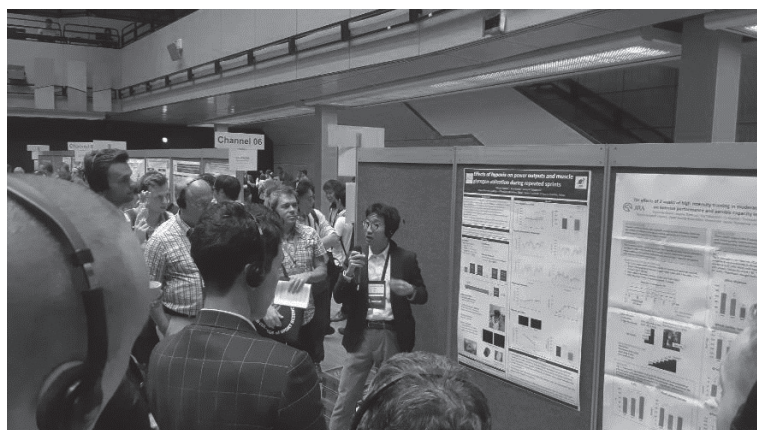


写真2 ポスター発表時の様子



写真3 クロージングパーティの様子

## 終わりに

本稿はヨーロッパスポーツ科学学会の第24回年次総会について、学会大会の内容を紹介した。特にまだ年次総会に参加したことがない若い研究者の参考になれれば嬉しく思う。繰り返しになるが、スポーツ科学を専門とする様々な分野の研究者と話をし、自身の幅を広げるには最適な学会大会ではないだろうか。

次回、第25回年次総会は2020年7月1日から3日まで、スペイン・セビリャにて開催される予定である。2020年は東京オリンピック・パラリンピック競技大会もあり、所属先や学会の予定が例年とは異なる1年ではあるが、興味と時間のある方は発表や参加を検討してはいかがであろうか。きっと人とも研究とも様々な出会いがあるだろう。